特別企画〈1〉

ヘンデル「メサイア」の魅力と背景を探る

Georg Friedrich Händel（1685～1759）

ゲオルグ・フリードリッヒ・ヘンデル（1685～1759）

【芸術現代社の新刊書籍】

エリーザベト・フルトヴェングラー　一〇一歳の少女

フルトヴェングラー夫妻、愛の往復書簡

クラウス・ラング著
野口　剛　夫　訳

絶賛発売中！

エリーザベト夫人の激白！
フルトヴェングラー・ファン必須の書
ついに邦訳刊行

現在一〇〇歳を超えてなお活発に夫の語り部であり続けるエリーザベト夫人。クラウス・ラングによるロング・インタビューで明かされる数々の真実、そして初公開となるヴィルヘルムとエリーザベト二人の往復書簡は、従来のフルトヴェングラー像にいっそう輝きと奥行を与える。話題の大著が、夫人とも親交のある野口剛夫氏（東京フルトヴェングラー研究会代表）の翻訳でついに本邦に登場！

目次

第一部　エリーザベト・フルトヴェングラーとの対話
第1章　カティンカ
第2章　ハンス・アッカーマン
第3章　マリア
第4章　ヴィルヘルム・フルトヴェングラーとの結婚
第5章　第三帝国と戦後
第6章　残り少ない人生
第7章　フルトヴェングラーの性格
第8章　モニ・リックマース
第9章　アルマ・マーラーとオスカー・ココシュカ
第10章　アクラ・シルヴァ
第11章　三人のベルリン子たち
第12章　死後の名声
第13章　カルロス・クライバーとの文通
第14章　エリーザベト・フルトヴェングラーへの最後の問い
第二部　往復書簡

A5判／348頁／定価：3，000円＋税

㈱芸術現代社　〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11 TOMY BLDG. 3F
TEL 03-3861-2159　FAX 03-3861-2157

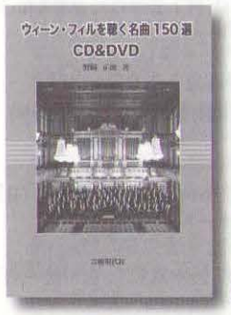
【芸術現代社の新刊書籍】

ウィーン・フィルを聴く名曲150選 CD & DVD

野崎　正俊　著

世界で最も愛されているウィーン・フィルの名盤！

ヨーロッパの奥座敷に位置するウィーンの芸術を今に伝えるウィーン・フィルは、クラウス、ワルター、フルトヴェングラー、カラヤン、ベーム、バーンスタイン、クライバー、ショルティ、マゼール、アバド、ティーレマンなどの名指揮者たちと数々の名演を生み出してきた。コンサートとオペラの両面で活躍するほか、ザルツブルク音楽祭の常連として出演、近年は恒例のニューイヤー・コンサートを通して世界中の音楽ファンを魅了してやまない。そのオーケストラが録音した名演のCDとDVDを幅広く紹介するファン待望の書。



絶賛発売中！

目次

《交響曲》ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェン・シューベルト・ベルリオーズ・メンデルスゾーン・シューマン・フランク・ブルックナー・ブラームス・チャイコフスキー・ドヴォルザーク・マーラー・R・シュトラウス・プロコフィエフ・ショスタコーヴィチ
《管弦楽曲》モーツァルト・ベートーヴェン・ウェーバー・シューベルト・リスト・ワーグナー・スメタナ・レントゲンJ・シュトラウス・ブラームス・ムソルグスキー・チャイコフスキー・ドヴォルザーク・リムスキー＝コルサコフ・R・シュトラウス・ホルスト・ハチャトゥリアン
《協奏曲》モーツァルト・ベートーヴェン・シューマン・ブラームス・チャイコフスキー・R・シュトラウス・コルンゴルト
《宗教曲》バッハ・ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェン・ルックナー・ブラームス・ヴェルディ
《歌曲》ブラームス・マーラー・R・シュトラウス
《歌劇》モーツァルト・ベートーヴェン・ウェーバー・ワーグナー・ヴェルディ・スメタナ・J・シュトラウス・ビゼー・チャイコフスキー・プッチーニ・R・シュトラウス・フンパーディンク・レハール・ベルク《付》ニコライ

A5判／252頁／定価：2，300円＋税

㈱芸術現代社　〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11 TOMY BLDG. 3F
TEL 03-3861-2159　FAX 03-3861-2157

特別企画〈1〉　ヘンデル「メサイア」の魅力と背景を探る　I

「メサイア」作曲のきっかけ、経緯、初演

～24日間で全パートを書き上げ完成させた驚異！～

保延裕史

ヘンデルは、父親に禁じられた音楽の道を自ら切り開き、青年時代ハンブルクでオペラを作曲して成功、以後天才の名声をほしいままにヨーロッパ中を渡り歩き、社会的経済的に作品を流通させ得た、この時代最初の「国際人」だった。

現代最高の古楽指揮者N・アーノンクールは著書の中で、「彼（ヘンデル）が大成功した大きな理由は、彼がその時々の聴衆が理解できる音楽言語を用いて書いたこと…ヘンデルの作品は作曲者と聴衆の間の交流を映し出した鏡像」だったと述べている（「古楽とは何か」より）。事実、イタリアでオペラの修業を積んだヘンデルが英国で最初に成功を収めたのは、自ら作曲し一座を組んだオペラの興行と英国貴族が好んだ祝典音楽、機会音楽だった。どちらも当時のロンドン市民や貴族の嗜好を敏感に察知した結果だった。

ヘンデルのオペラは1711年初演の「リナルド」から「ディダミア」（1741年）まで30年にわたってロンドン市民を熱狂させたが、ライバルの出現や経済的破綻から何回も危機に陥った。彼はオペラの筆を執り続けたものの、最終的には聴衆の離反を悟った。そこで彼が思い至ったのが、聴衆が理解できないイタリア語によるオペラから、自国語である英語によるオラトリオへの転向だった。

オラトリオはオペラと同様、独唱、合唱、器楽を用いたドラマだが、題材が宗教的で、衣装や道具を使わず（演技を伴わない）点が特徴だ。ヘンデルはそれまでもいくつかのオラトリオを作曲し、オペラの不人気をオラトリオで挽回していた。彼はオペラとオラトリオの中間的性格をもつ「サウル」（1738）以後、オラトリオ作曲に傾倒し、「サムソン」（1742）「ユダス・マカベウス」（1747）など、旧約聖書の英雄たちを劇的に描くオラトリオを数多く作曲した。その中で1741年に書かれた「メサイア」は、作曲から初演と再演まで特異な経過をたどったオラトリオだった。

「メサイア」作曲の契機は、台本作者チャールズ・ジェネンズ（1700～73）によってもたらされた。ヘンデルより15歳年下で彼の信奉者だったジェネンズは既に「サウル」で台本を提供しており、彼のオラトリオの成功への確信を抱いていた。ジェネンズによる「メサイア」の台本を読んだヘンデルは、オペラへの情熱を失ってしまった1741年いっぱいを休養に当てようとしていた気持ちを翻し、勢いを得て急遽作曲に取り掛かった。特定の人物の物語でなく、聖書の言葉を自由に扱った宗教的抽象劇に心惹かれたからだった。彼は速筆で知られているが、それでも8月22日から9月14日までの24日間で、全てのパートを完成させたのは驚異と言えるだろう。召使が食事を持参しても無視したとか、夜中に涙を流しながらアリアを作曲したという逸話があるが、これほど熱意をもって書かれたにもかかわらず、この作品の初演は遅れた。

ヘンデルの記念碑（ロンドン、ウェストミンスター・アビ、手に持っている楽譜は「メサイア」第3部「我知る、我をあがなうものは生きることを」の開始部分）

話を戻そう。「メサイア」作曲の契機としてさらに重要なのは、アイルランド総督ウィリアム・カヴェンディッシュからのダブリン招請だった。

総督は当地の慈善演奏会にヘンデルが自作のオラトリオを演奏するよう依頼した。この機にヘンデルは出発に間に合わせるべく新作「メサイア」を急いで作曲したと考えられるが、到着してすぐの1741年冬のシーズンには「アチスとガラテア」「エステル」など旧作だけが上演された。ダブリンでのヘンデルは大いに歓迎され、そのため翌1742年まで滞在は延長された。そして満を持して4月13日、ダブリンのミュージック・ホールで「メサイア」は初演された。

何故「メサイア」の初演が遅れたのかという疑問には、ヘンデルが世渡り上手な商売人だったからと答えるのが最も適切だろう。当時の新聞記事や広告で（市民が待ち望んだ）「新作オラトリオ」がいよいよ演奏されるという期待を煽り、十分な準備期間にロンドンから優秀な歌手や器楽奏者を呼び寄せ、リハーサルを公開したうえ、演奏会をわざと一日遅らせるなど周到な策を講じたのだ。「ご婦人はフープ（スカートの張骨）を付けずに…」と新聞（ダブリン・ジャーナル4月13日広告）に掲げたのも宣伝のためだ。その結果「メサイア」の初演は慈善演奏会という名目もあって大成功だった。おそらくヘンデルはこの名声がロンドンに届き、再び彼がかの地で脚光を浴びるチャンスが訪れるのを意図していた。

だが、事はそう旨くは運ばなかった。「メサイア」はダブリンや他の都市での上演が重ねられ、各地で称賛されたが、ロンドンでは以前「サウル」上演の際に聖書の物語を劇場で上演することへの反発があり、「メサイア」を騒動に巻き込みたくなかったため、上演の時期を慎重に選ばなければなかったのだ。「メサイア」に続く「サムソン」が好評を得た段階でようやく「新しい宗教オラトリオ」という名称で予告、1743年3月23日、コヴェントガーデン劇場で初演に漕ぎつけたものの、聴衆の反応は鈍く、主要新聞はこの上演を無視した。

因みに、この上演の時に臨席していた国王ジョージII世が第2部最後の「ハレルルヤ」で感動のあまり立ち上がったという逸話は、反応の薄い客席の中、ヘンデルの擁護者だった国王がせめてもの賛辞を贈ったというのが本当らしい。

その後の限られた再演（1745年4月9日、11日および初めて「メサイア」の名称で行われた49年3月23日）で、この作品は徐々に人々に認知容認されていった。「メサイア（救世主）」という名をもつ劇場作品への拒否反応が薄れていったのだ。

そして、このオラトリオのもつ普遍性と音楽の素晴らしさが人々に理解され、正当な評価と絶賛を得るようになったのは、1750年5月1日に行われた捨子養育院礼拝堂での上演の成功がきっかけとなった。これ以後、捨子養育院での上演はヘンデルの死の年まで毎年欠かさず行われ、「メサイア」は作曲家ヘンデルの代表作として、またオラトリオの代名詞として名声を保ち続けることになったのだった。

ヘンデル「メサイア」公演日程

♪12月8日・15時、石川県立音楽堂・コンサートホール
・指揮＝三河正典、管弦楽＝オーケストラ・アンサンブル・金沢、合唱＝北陸聖歌合唱団、OEKエンジェルコーラス、他［石川県立音楽堂 ☎076-232-8632］

♪12月9日・14時、テアトロ・ジーリオ・ショウワ
・指揮＝山館冬樹、管弦楽＝昭和音楽大学管弦楽団、合唱＝昭和音楽大学合唱団［昭和音楽大学チケットセンター ☎044-953-9899］

♪12月14日・14時30分、神奈川県立音楽堂
・指揮＝小泉ひろし、管弦楽＝神奈川フィルハーモニー管弦楽団、合唱＝神奈川県合唱連盟［チケットかながわ ☎0570-015-415］

♪12月14日・15時、横浜みなとみらいホール・大
・指揮＝山館冬樹、管弦楽＝昭和音楽大学管弦楽団、合唱＝昭和音楽大学合唱団［横浜みなとみらいホール・チケットセンター ☎045-682-2000］

♪12月19日・15時、ミューザ川崎シンフォニーホール
・指揮＝鈴木雅明、管弦楽・合唱＝バッハ・コレギウム・ジャパン［ミューザ川崎シンフォニーホール ☎044-520-0200］

♪12月23日・15時、サントリーホール
・指揮＝鈴木雅明、管弦楽・合唱＝バッハ・コレギウム・ジャパン［サントリーホール ☎0570-55-0017］

特別企画〈1〉　ヘンデル「メサイア」の魅力と背景を探る　2

オペラ・オラトリオ・カンタータ

～「メサイア」は少し特殊なオラトリオ～

澤谷夏樹

ヘンデルの《メサイア》（一七四一～四二）は少し特殊なオラトリオだ。この「少し特殊な」様子を理解するには、十七世紀から十八世紀前半の三大声楽ジャンルの違いを踏まえておかなければならない。

オペラとは歌芝居のこと。音楽のバロック期はこのジャンルとともに幕を開けた。オペラでは歌手が、芝居をしつつ台詞をすべて歌い上げる。場面の進行に寄与するレティタティーヴォ（叙唱）と、その進行を断ち切り、主に登場人物の心情を歌うアリアとが交代で現れる。ときに重唱や合唱も挿し入れられる。劇的な台本は通常の芝居と同様、戯作者が自由に書いたものだ。

オラトリオはオペラから芝居を取り去ったもの。レティタティーヴォとアリアの交代に、重唱や合唱が挿し入れられる進行を、オペラと共有している。作家が自由に書いた台本は、オペラと同じく劇的だが、内容は宗教的・教訓的なものが多くなる。音楽面では合唱の役割が増している。

カンタータはオペラやオラトリオに比べ小規模で、芝居はなく、台本も劇的でないことが多い。世俗的な恋愛譚から聖書の言葉まで、内容は多岐にわたる。音楽の進行は前二者と共通するところが多いが、より柔軟性が高い。

こうしてみるとオラトリオの特徴がよくわかる。オラトリオとは（一）宗教的・道徳的な内容の劇的な台本を、（二）芝居をつけずに、（三）レティタティーヴォとアリアの交代に、重唱や合唱を挿し入れつつ歌い進める、（四）大規模な編成の声楽ジャンル、ということになる。

★台本の特殊性

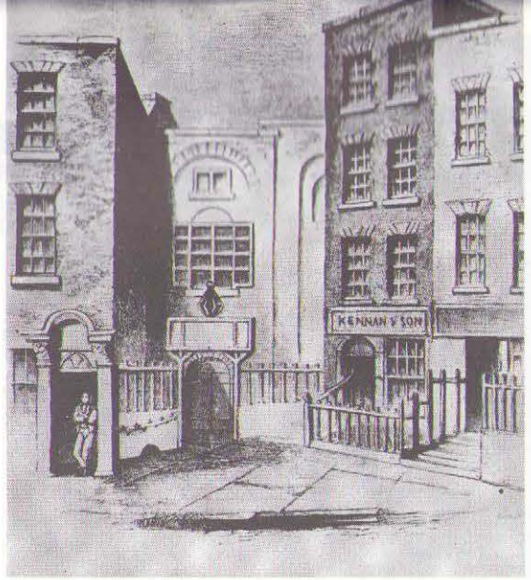
作家チャールズ・ジェネンズ（一七〇〇～七三）は《サウル》、《ベルシャザル》、《メサイア》といったヘンデルのオラトリオに台本を提供した。作家といってもディレッタントであり、実際はオックスフォード大学出身の裕福な郷士。聖書や古典、文学や美術に精通しており、熱心な音楽愛好家にして、筋金入りのヘンデル・ファンだった。

《メサイア》が「少し特殊だ」というのは、このジェネンズの台本によるところが大きい。というのもこの台本は、オラトリオにもかかわらず劇的ではなく、いくらか調えられてはいるものの、聖書の言葉をほとんどそのまま取り入れている。つまり、オラトリオというにはドラマ性に乏しく、内容があまりにも聖書そのものに傾き過ぎている。

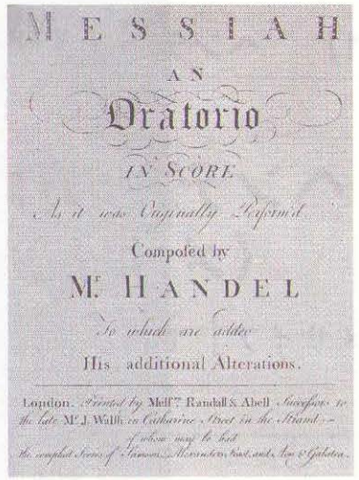
★音楽の特徴

起伏に乏しく、きわめて聖書臭の強い台本からヘンデルは、宗教的感動に基づく豊かなドラマ性と、オペラにもつながる音楽的興奮とを引き出して見せた。台本の特殊性と、それをもう一方の極へと振れさせるヘンデルの作曲の手腕によって、《メサイア》はユニークなオラトリオとなった。

ヘンデルの卓越した筆は、たとえば〈谷はすべて身を起こし Every Valley shall be exalted〉に典型的に現れている。ここでは、旧約聖書「イザヤ書」第四十章第四節の言葉に対して、誰でも口ずさめるほど旋律的で、表現の起伏に富んだ旋律がつけられる。その旋律は一方で、当時の音楽修辞法とも密接に結びついている。



「メサイア」が初演されたダブリンのニールズ音楽堂


MESSIAH
AN
Oratorio
IN SCORE
As it was Originally Performed
Composed by
Mr. HANDEL
To which are added
His additional Alterations.
London. Printed by Mess.rs Randall & Abell Successors to the late Mr. J. Walsh in Catharine Street in the Strand.
「メサイア」初版譜の表紙

「すべての谷は」の言葉にはつねに上行音形があてられ、「身を起こし」の詩と呼応する。「山と丘は身を低くせよ and every mountain and hill made low」の旋律線は、山と丘の高低を造形しつつ、「low」で平地まで音が下がる。ノコギリの歯のような音形と長い音符とが対比される「曲がった道は真っ直ぐに the crocked straight」「荒地は平野となれ and the roughplaces plain」では、ジグザグの跳躍進行と長い保続音形とが組み合わされる。

このようにヘンデルの音楽では、言葉の韻律、情緒の起伏、音楽としての自然さ、伝統に則った修辞法とが溶け合う。この溶け合いの高度さが、《メサイア》の名声を支える最大の要因だ。

★《メサイア》のオーケストラと合唱

ヘンデルが上演に関わった楽曲のオーケストラ編成は、当時の記録やパート譜の保存状況などから再現できる。《メサイア》の場合、出演者への支払いの帳簿が確かな証拠だ。一七五四年の孤児養育院での公演に際して記帳されたものによると、同年の規模は管弦楽二十八人、歌手十八人、少年（ボーイ・ソプラノ）四人。それぞれを細かく見ると、次のようなことがわかる。

管弦楽の内訳はヴァイオリン十四（おそらく第一・第二で半々）、ヴィオラ六、チェロ二、コントラバス一、オーボエ四、ファゴット四、トランペット二、ティンパニ一、オルガン一、その他（ホルン）二。スコアにはないホルンが含まれているのが興味深い。考えられる可能性はふたつ。ひとつは幕間の協奏曲のみ出演した。ひとつは演奏に際して総譜にない声部補強をおこなった。たとえば大きな合唱楽章で、トランペットのオクターヴ下を重ねて演奏するなどだ。

歌手の十八人にはソリストも含まれている。当時の独唱のパート譜には合唱の声部も書かれているので、ソリストは独唱も合唱もどちらも歌ったということになる。合唱のパート分けは、少年四と女声二とでソプラノ六、男性アルト四、テナー四、バス八。合唱に関しては低声の厚みが目立つ。

楽器が十八世紀様式であることに鑑みれば、管弦のバランスは管楽器寄り、器楽と声楽とのバランスは声楽寄り、高音と低音とのバランスは低音寄りということが分かる。こうした資料からバランスを割り出し、現代の演奏につなげていくことで、これまで聴くことができなかった新しい楽曲像が浮かび上がる可能性もある。それはピリオド楽器を用いる場合だけでなく、モダン楽器の管弦楽でも大きな効果を発揮することが期待できる。《メサイア》はベートーヴェンの《第九交響曲》と並び、アマチュア音楽家にとって親しみ深い曲。編成の工夫が新たなステージを切り開いてくれるかもしれない。

特別企画〈1〉　ヘンデル「メサイア」の魅力と背景を探る　3

ヘンデルの作品における〈メサイア〉の位置

～「メサイア」で再び栄光を取り戻したヘンデル～

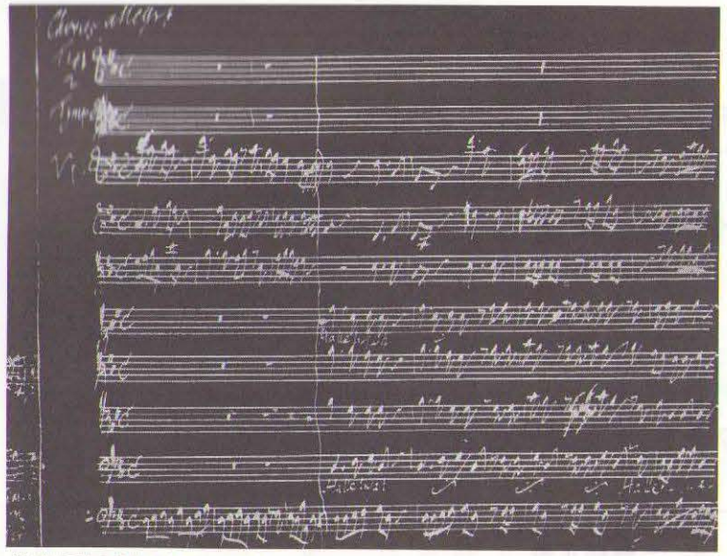
村原京子

★オペラからオラトリオへ

ヘンデルの作曲人生に於いて、オペラからオラトリオ創作へのターニングポイントとなった〈メサイア〉。ハンブルグ・オペラ、そしてイタリアへ学んだ習作時代を経て、1710年（25歳）から40年迄の30年間、イギリス・ロンドンにおけるヘンデルの活動の大半がオペラ創作、オペラ劇場の経営でした。再三の劇場経営不振・倒産を繰り返しながら、彼はイギリスでのイタリア・オペラを不動のものにし、40余曲のオペラ作品と凄まじいばかりの上演記録を残しています。その道は平穏なものでは無く、ライバル・オペラ劇団との抗争、有能歌手の争奪など創作以外の壁に苦悩、オペラ人気が危うくなると、オペラシーズンの演目にオラトリオを乗せ、急場を凌ぐ事も多々ありました。事実1732年から38年迄の6年間に、少なくとも6曲のオラトリオ（《エステル》《デボラ》《アタリア》《時と心理の勝利》《サウル》《エジプトのイスラエル人》）を創作、劇場で上演しています。これ等によって人気を取戻し、創作意欲、劇場経営再興の勇気を得ては再びオペラに邁進したのです。彼自身は「自分への人気が戻った！」と又々オペラ創作・上演に燃える、そんな繰り返しでした。それらは宗教作品でありながら、まさに「劇的オラトリオ」と呼ぶに相応しい作品ばかりです。無論コーラスを主体に数人のソリストから成り、演奏会形式に依ってはいますが、舞台装置、演技をつければオペラ？　として充分通用する構成、作品なのです。彼のオラトリオをオペラと比較する時、唯一最大の相違は歌詞が英語であるという事、やはり言葉の問題は大きかったと言えます。

演劇の国、シェークスピア劇伝統の国イギリスにおいて、舞台芸術としてのオペラは、当初から受け入れられました。それがイタリア語によるものであっても、舞台上で演じられる劇の発展、アリアの美しさ、歌手の技量の披瀝に人々は酔ったのです。しかし、母国語で語られる時、即ち英語によるオラトリオが鳴り響いた時、イギリス人聴衆の反応はオペラとは比べ物にならなかったようです。多くの聴衆はオラトリオに歓喜し、オペラとなると次第にその数は半減、虚しい拍手が…、そんな繰り返しの6年の末、遂に1740年暮れのシーズン、オペラ《デイダミア》（初演翌1741年1月）を最後に、彼はロンドン・オペラ界から引退、既にヘンデル56歳。身体的（脳卒中）にも、精神的にも力尽きての幕引きに、世間は「ヘンデルは二度と立ち上がれない」と噂しました。しかし、西に沈んだ太陽は、再び東の空から《メサイア》を掲げて輝き昇ったのです。

ヘンデルの初期オラトリオ台詞の大半（5曲）は、パンフィーリ枢機卿によるものでしたが、《サウル》（1738）で初めて台詞作家としてのチャールズ・ジェネンズの名が登場します。彼こそが1741年、消沈し休養を決め込んでいたヘンデルに再起を促す《メサイア》の台詞を提供した人物です。ジェネンズは当時、友人への手紙に「ヘンデルは次の冬は何もしないと言っていますが、彼のために書いた聖書の句に基づくもう一つの台本に作曲し、受難週間に彼自身の救済のために演奏するよう説得するつもりです。彼がその才能と技の全てを注ぎ、音楽が従来の作品をも越え、素晴らしいものとなる事を確信しています、その題材は何よりも卓越した《メサイア》（救世主）です」と綴っています。ジェネンズの台詞に感動したヘンデルは、時に涙しながら、食事にも手を付けず創作に没頭、20日ほどで書き上げたとされますが、当然そこには大切にしてきた自らの作品（習作時代のイタリア語カンタータ、或いは自身の数々の器楽曲からの再稿再掲）もあります。特に《メサイア》の中でも一際魅力的なシチリアーノリズムは、イタリア時代、スカルラッティから学び高め続けてきた技法の完成形と言えましょう。メサイアにはダブリン初演版、ロンドン初演版・再演版、捨子養育院版等々、多くのヴァージョンが存在しますが、楽譜が予約出版の形で初版印刷出版されたのは、作曲者死後1767年でした。



「メサイア」の「ハレルヤ・コーラス」の一部

★宗教曲史上の《メサイア》の位置

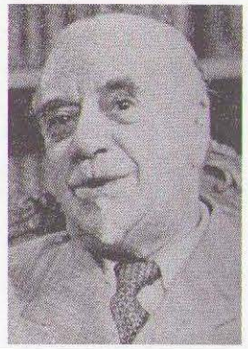
グレゴリオ聖歌に始まり多声化と共に宗教合唱曲が栄えた中世後期&ルネサンス期、典礼音楽としてラテン語によるミサ、マニフィカート等のカトリック宗教楽曲が全盛期を飾りました。16世紀初頭ルターの宗教改革の結果、新しいプロテタント・コラールが誕生した事も後世に多大な影響を及ぼしたのです。バロック期に入ると、オラトリウム（祈祷堂）を語源とする、〈オラトリオ〉がカヴァリエリやカリッシミにより誕生、更に発展したのがH・シュッツ、J・S・バッハ等のバロック・オラトリオ、教会カンタータです。これらは聖書から題材を採り、テノール独唱の説明役（エヴァンゲリスト）を中心に夫々が役柄を歌います。劇的演出は加えられず、演奏会形式で歌われるため、音楽の訴えは直接的で強烈なものとなり、オラトリオの伝統・演奏形態が確立したのです。ヘンデルはこの手法に多大な影響を受けましたが、彼の中にあったオペラ魂が先人達のそれとは異なる方向を歩んだ事は否めません。

とは言え、《メサイア》が次代のJ・ハイドンやW・A・モーツァルトに刺激と影響を及ぼした事も明らかです。60歳前後に2度イギリスを訪問したハイドンは、ヘンデルの死後その地で盛んに演奏されていた《メサイア》に感動、本来ヘンデルのために書かれたとされる《天地創造》の英語の台詞を貰い受けウィーンに持ち帰り、スヴィーテン男爵にドイツ語訳を依頼したのです。ハイドン〈天地創造〉の誕生でした。モーツァルトにドイツ語版ヘンデル《メサイア》を編曲させたのもスヴィーテン男爵です。スヴィーテンは、ロンドンでヘンデル死後の《メサイア》人気が沸騰していた頃（1769年頃）外交官として当地に滞在、《メサイア》に魅せられ、初版出版楽譜を入手、帰国と共にウィーンでドイツ語版バロック・オラトリオの上演に力を注いだ人物でした。

特別企画〈1〉　ヘンデル「メサイア」の魅力と背景を探る　4

ヘンデル「メサイア」のCD＆DVD

～往年の名演・名盤から オーセンティックなピリオド奏法録音まで～


トマス・ビーチャム

野崎正俊

★ビーチャム／ロイヤル・フィル＆同唱、ヴィヴィアン（S）、シンクレア（Ms）、ヴィッカーズ（T）、トッツィ（B）（R）

これは名指揮者ユージン・グーセンスが現代の大オーケストラ用に編曲した版による演奏として以前から名高いCDである。そこに「メサイア」が教会ではなくて、劇場ないしは演奏会場で上演されることを目指したヘンデルの意図を尊重していることが分かる。したがって演奏はひときわ華麗かつスケールが大きい。今日の基準に照らすと若干締まりを欠いているとはいえ、ビーチャムの指揮であるだけに、それなりの品格が滲み出ている。

★リヒター／ミュンヘン・バッハ管・同唱、ヤノヴィッツ（S）、ヘフゲン（A）、ヘフリガー（T）、クラス（B）（DG）

これも異色のスタイルを持つ演奏である。というのは歌詞がドイツ語訳によっている。ドイツではこの曲をドイツ語で歌うことが少なくないようで、他にもドイツ語訳盤の録音が存在する。リヒターがバッハ解釈者として全盛期にあった時代にあたり、この演奏もヘンデルというよりは彼の峻厳なバッハ観に通ずるところがある。ヘンデルが元来ドイツ人であることを思い出させることでも貴重である。ソリストも大変すぐれている。なおリヒターは八年後にロンドン・フィルを指揮して改めて英語版を録音している（DG）。

★マッケラス／ウィーン放送響・唱、マティス（S）、フィンニレ（A）、シュライアー（T）、アダム（B）（AI）

このCDの演奏にはモーツァルト版が用いられている。モーツァルト当時のオーケストラの標準である二管編成によっていて、原曲にはない多くの管楽器が用いられていて、彩りを豊かにしている。それでもモーツァルトのヘンデルに対する畏敬の念も十分に払われていて原曲の精神は損なわれていないとはいうものの、ヘンデルとモーツァルトの合作という趣が強い。この編曲作品はモーツァルトのK572の作品番号が与えられている。演奏は奇を衒ったところのないオーソドックスな安心感がある。

★シェルヘン／ウィーン国立歌劇場管、ウィーン・アカデミー唱、アラリー（S）、メリマン（A）、シモノー（T）、スタンデン（B）（West）

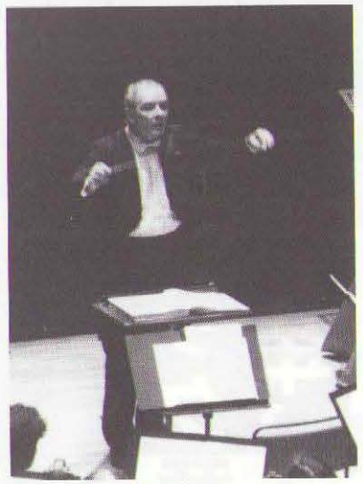
この曲はモーツァルトの他に、メンデルスゾーンやフランツなどの編曲版が存在する。一般にはクリュザンダー校訂のオイレンブルク版を基にしたヘンデル全集版で演奏されることが多いようだが、ヘンデル自身時に応じて楽器編成を書き直しているので最終稿というのはない。この録音は一七四二年のダブリン初演版と記されている。演奏は学究派シェルヘンらしい厳格さとあくの強い個性的な解釈とが同居した面白さがある。

★シモーネ／イ・ソリスティ・ベネト、アンブロジアン唱、シューマン（S）、ヴァレンティーニ＝テラーニ（A）、フォード（T）、ハウエル（B）（Koch／Europa）

近代オーケストラが肥大化するにつれ、その反省に立ってオーセンティックなスタイルの演奏が追求されるようになる。「メサイア」もその例外ではなく、バロック・オーケストラによる演奏が台頭する。これはまだピリオド奏法による演奏ではなく、バロックとモダン両スタイルの折衷的な演奏といえるだろう。こじんまりとした小編成オーケストラが起用されているだけに透明な響きが好ましい。

★ホグウッド／エンシェント室内管、ウェストミンスター寺院聖歌隊、ネルソン（SI）、カークビー（SII）、ワトキンソン（A）、エリオット（T）、トーマス（B）（W）DVD

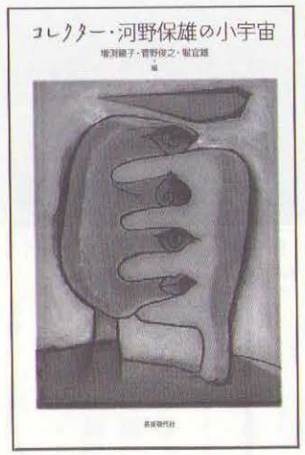
このDVDは一九八二年ウェストミンスター寺院での収録である。同じメンバーによる七九年録音のCD（D）には一七五四年の捨子養育院版と記されており、このDVDには記載はないがそれに準じているようだ。無人の大聖堂に響きは壮麗で、いかにもヘンデルのオラトリオらしい。ナチュラル・トランペットなど古楽器の演奏を目で確かめられるのも貴重である。コーラスの女声パートは少年合唱で担われている。出番はすくないものの、カークビーのソロが清楚きわまりない。


クリストファー・ホグウッド

★アーノンクール／ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス、A・シェーンベルク唱、シェーファー（S）、ラーソン（A）、シャーデ（T）、フィンレイ（B）（HMD）

アーノンクールにとっての二度目の録音であるが、大胆な枠組みの中にも緻密な譜読みが隅々まで行き届いていて、それが強い説得力を生んでいる。彼にはやはり古楽器オーケストラの方がふさわしいが、それが手兵を率いているだけにいっそうの個性が発揮されているようである。シェーファー以下の歌手もいたずらに華美に走らずに心のこもった歌唱を聴かせている。

★ミンコフスキ／グルノーブル・ルーブル宮音楽隊・唱、ドーソン（S）、コジェナー（Ms）、ヘリカント（A）、アサワ（CT）、エインズリー（T）、スミス（Br）、バナタイン＝スコット（B）（AI）

ヘンデルの音楽らしい快活さとバロック音楽特有のダイナミックなスタイルが合致して活気にあふれた演奏を生み出している。ピリオド・オーケストラの奏法にもすぐれているので音楽の流れが実にスムーズなのは当然としても、そこにミンコフスキの才気も感じられる。ソリストもこの曲にふさわしい歌手がキャスティングされており、中でもドーソンのトリル唱法は見事である。

■芸術現代社■
コレクター・河野保雄の小宇宙
増渕鏡子・菅野俊之・堀宜雄 編
おもねらず、競わず。静かに時代が追いついてくる。
長谷川利行、青木繁、関根正二、岸田劉生、鶴岡政男、
桂ゆき、山中春雄、小山田次郎…
魂の画家たちとの宿命の出会いと別離。
そして鮮烈なデビューをかざった気鋭の音楽評論家時代。
とりのこされた、最後のコレクター
河野保雄とは何者か!?
㈱芸術現代社刊　B５変形判　定価（1,800円＋税）